

福沢諭吉著「学問のすすめ」岩波文庫 1942年12月21日刊を読む

学問のすゝめ 12編 - 演説の法を勤むるの説

1. 演説とは英語にて「スピーチ」と言い、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思うところを人に伝うるの法なり。我国には古よりその法あるを聞かず、寺院の説法などは先ずこの類なるべし。西洋諸国にては演説の法最も盛んにして、政府の議院、学者の集会、商人の会社、市民の寄合より、冠婚葬祭、開業開店等の細事に至るまでも、僅に十数名の人を会することあれば、必ずその会につき、或いは会したる趣意を述べ、或いは人々平生の持論を吐き、或いは即席の思付を説きて、衆客に披露するの風なり。この法の大切なるは固より論をまたず。譬えば今世間にて議院などの説あれども、仮令い院を開くも第一に説を述ぶるの法あらざれば、議院もその用をなさざるべし。
2. 演説をもって事を述べればその事柄の大切なると否とは姑く擱き、ただ口上をもって述ぶるの際に自ずから味を生ずるものなり。譬えば文章に記せばさまで意味なき事にては、言葉をもって述べればこれを了解すること易くして人を感じしむるものあり。古今に名高き名詩名歌というものもこの類にて、この詩歌を尋常の文に訳すれば絶えて面白き味もなきが如くなれども、詩歌の法に従ってその体裁を備うれば限りなき風致を生じて衆心を感動せしむべし。故に一人の意を衆人に伝うるの速やかなると否とは、そのこれを伝うる方法に関する事甚だ大なり。
3. 学問はただ読書の一科に非ずとのことは、既に人の知るところなれば今これを論弁するに及ばず。学問の要は活用に在るのみ。活用なき学問は無学に等し。在昔或る朱子学の書生、多年江戸に執行して、その学流に就き諸大家の説を写し取り、日夜怠らずして数年の間にその写本数百巻を成し、最早学問も成業したるが故に故郷へ帰るべしとて、その身は東海道を下り、写本は葛籠に納めて大廻しの船に積み出せしが、不幸なる哉、遠州洋において難船に及びたり。この災難に由って、かの書生もその身は帰国したれども、学問は悉皆海に流れて心身に附したるものとは何一つ物もあることなく、いわゆる本来無一物にて、その愚は正しく前日に異なることなかりしという話あり。今の洋学者にもまたこの掛念なきに非ず。今日都会の学校に入りて読書講論の様子を見れば、これを評して学者と言わざるを得ず。されども今俄にその原書を取上げてこれを田舎に放逐することあらば、親戚朋友に逢うて我輩の学問は東京に残し置きたりと言訳けするなどの奇談もあるべし。
4. 故に学問の本趣意は読書のみならずして精神の働きに在り。この働きを活用して実地に施すには様々の工夫なかるべからず。「オブセルベーション」(observation)とは事物を視察することなり。「リーゾニング」(reasoning)とは事物の道理を推究して自分の説を付ることなり。この二箇条にては固より未だ学問の方便を尽したりと言うべからず。なおこの外に書を読まざるべからず、書を

著さざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かって言を述べざるべからず、この諸件の術を用い尽して始めて学問を勉強する人と言うべし。即ち、視察、推究、読書はもって智見を集め、談話はもって智見を交易し、著書演説はもって智見を散ずるの術なり。然り而してこの諸術の中に、或いは一人の私^{わたくし}をもつて能すべきものありと雖ども、談話と演説とに至っては必ずしも人と共にせざるを得ず。演説会の要用なること、もって知るべきなり。

5. 方今我國民において最も憂うべきは、その見識の賤しき事なり。これを導きて高尚の域に進めんとするは、固^{もと}より今の学者の職分なれば、苟^{いやしく}もその方便あるを知らば力を尽してこれに従事せざるべからず。然るに学問の道において談話演説の大切なるは既に明白にして、今日これを実に行う者なきは何ぞや。学者の懶惰^{らんた}と言うべし。人間の事には内外兩様の別ありて、兩^{ふたつ}ながらこれを勉めざるべからず。今の学者は内の一方に身を委^{まか}して外の務めを知らざる者多し。これを思わざるべからず。私^{わたくし}に沈深なるは淵の如く、人に接して活潑なるは飛鳥の如く、その密なるや内なきが如く、その蒙大なるや外なきが如くして、始めて真の学者と称すべきなり。

P.105 ~ 108

[コメント]

東京、三田の慶應義塾大学に三田演説館という建物がある。狭いながらも福沢先生の教えて下さった「スピーチ」の場として多くの人々に親しまれている。イギリス、ロンドンのハイドパークの一角にスピーカーズ・コーナーとよばれる広場がある。日曜日に行ったことがあるが、各自の用意したミカン箱のようなものの上で数人の前で自由に演説していた。様々なスピーチがある。開倫塾の授業の中に3分間行われる「武者語り」も「スピーチ」の一つと私は考える。立派なスピーチは教育の成果。誇りを持って行ってもらいたい。

- 2010年6月25日 林明夫記 -